

トマス・アキナス『神学綱要』における キリストの受難と死（『神学綱要』抄訳）

Christ's Passion and Death : translation of selected chapters from
'*Compendium Theologiae*' by Thomas Aquinas

山口隆介
Yamaguchi Ryusuke

要 約

『神学綱要』 *Compendium Theologiae* は、トマスの著作の中でもあまり研究される事がない著作であり、全体の邦訳もいまだ存在しない。しかし、神の存在証明に関して、『神学大全』よりすぐれていると言及されることもあるように、著作としての独自性がないわけではなく、コンパクトであるため『神学大全』より議論の大きな流れを捉えやすいという利点もある。本稿は、『神学綱要』第1部第226～232章および第239章を訳出したものである。邦訳がない本書のキリスト論を知る手掛かりとなれば幸いである。

Key Words : *Compendium Theologiae*, 『神学綱要』, キリスト, 死, 受苦

第226章 キリストに受け取られた諸々の欠陥について

また、神の御子が人性を受け取ったのは、人間の救いのためには適切だった。すなわち、本性を受け取ったということで、〔神の御子は〕完全な恵みと知恵による人間の救いという目的を示した。そして同じく、神の御言葉が人性を受け取ったということで、人類の解放に最も相応しいやり方に合うなんらかの制約があり、また、人間に最も合うやり方があった。この、不正によって滅び、正義によって再生する人間に。

また正義の秩序が要求するのは、罪を犯すことでなんらかの罰を負う者となった人が罰を解かれて自由になることである。しかし、我々が友によってなし、受けることは、ある仕方で我々自身がなし、受けられる。というのも、愛は互いに愛し合う2人がある意味で1つにする相互の力だからである。それゆえ、誰かが友が彼のために十分なことをしてくれたおかげで解放されたというのは、正義の秩序に一致せぬものではない。また、最初の親の罪により全人類に滅びが来たのであり、ある人への罰が全人類を解放するのに十分だということはある得ない。すなわち、単なる1人の人間が償うことで、すべての人々を解放するのに値するような償いなどはなかった。同じくまた、天使が人類への愛からそれ〔最初の親、または人類の罪〕を償えたとしても、正義に照らせば十分〔な償い〕にならない。すなわち、天使は、無限の有限のものどもと有限のものどもの諸々の罪とに十分なだけ償う、無限の尊厳を有さない。先立つ箇所¹で我々が言った

ように、神だけが、無限の尊厳を有しているのだ。すなわち、肉を受け取って人間のために十分なだけ償ってくださった方だけが。このような者〔肉を受け取って人間の罪の十分な埋め合わせをする者〕は、それゆえ、人間のために人性を受け取り、これ〔人性〕により、人間が罪を犯したためにそれに値するのが明らかな諸々のものを、人間に代わって苦しむことができるようになる。

また、人間が罪を犯すことで遭う罰は何もかも、償うことができるわけではない。すなわち、人間の罪は、神から離れて変わり易い〔変わりゆく〕善に向かうことで生じる。そして、人間が罪のために罰せられるのは次の両方の形で、すなわち、恵みと他の賜物を欠き、それらによって神に結び付けられることがないということと、それどころかそのために神から離れたはずのもののためのために労苦と欠陥で苦しめられて当然の身になることとの両方の形で、である。したがって、かの償いがうまくいったのなら、罪びとがわり易い〔変わりゆく〕善のうちで苦しんでいる罪により、神に呼び戻されたのでなければならぬ。そして、この呼び戻しは、人間を神から引き離れたあの諸々の罪と反対である。したがって、誰も、恩寵を欠いていることでもって、あるいは、神を知らないことでもって、あるいは無秩序な靈魂を有することでもってしては、たとえ、これが罪への罰だとしても、神に罪を償うということはなく、何かを悲しむことで、そして外的な事物を失うことでそうするのである〔したがって、みな、恩寵を欠いていることで、あるいは神を知らないことで、あるいは無秩序な靈魂を有することではなく、何かを悲しむことで、そして外的な事物を失うことで、神に罪を償っているのである〕。

したがって、キリストは、人間が神から引き離れたあの欠陥を、たとえそれらが罪への罰だとしても、恩寵の欠如、無知、またはその類のこととして受け取ってはならなかった。すなわちこうであったなら、償うのに必要な能力が、少なくなるからである。さらに人間の救い主であるには、先立つ箇所ⁱⁱ で言ったとおり、恵みと知恵に満ちている必要があった。しかし、人間は罪のゆえに、死なねばならないことになり、体と靈魂の面で苦しみを受けるものになったので、その類の欠陥をキリストは受け入れることを欲した。人間に代わって死を受けることで、人類を贖うために。

やはり注目すべきは、以上の類の欠陥が、キリストと我々に共通しているが、それでもキリストと我々とは違う理由で見出されている。すなわち、既に言ったⁱⁱⁱ ように、この類の欠陥は、最初の罪の罰であり、したがって、我々は、損なわれた起源から原罪を〔我が身に〕引き付けているので、その帰結としてこれらの欠陥は我々にとっては〔自ら〕引き付けたものである。しかし、キリストは、その起源から罪による汚れを〔その身に〕引き付けなかった。上記のような欠陥は、御自分の意志で受け容れられたのである。それゆえ、〔キリストは〕以上の不足を引き付けたのではなく、むしろ受け容れたと言わなければならない。引き付けられるとは、他のものに必然性によって引き寄せることだからである。しかし、キリストは、以上のような不足無しに人性を受け容れることができた。〔現に〕過ちの醜さなしに〔人性を〕受け容れたように。そして、理性の秩序は、過ちのない人は罰もないことを要求すると思われる。そうであるならば明らかに、どのような必然性によっても、損なわれた起源のための必然性によっても、正義の必然性によ

ても、彼〔キリスト〕のうちに欠陥はなかったのだ。それゆえに、〔結論として〕残るのは、引き付けたのではなく、本人の意志で受け容れた欠陥が、彼〔キリスト〕のうちにあったということである。

しかし、我々の体がこれまで語ってきた欠陥に従属するのは、罪の罰としてであり、すなわち罪の前にはこれら〔欠陥〕から自由だったので、キリストが、上記のような欠陥を自分の肉で受け容れている以上、罪の類似を〔御自身の身に〕もたらしたのである。だから、『ローマの教会への手紙』第8章〔第3節〕の使徒の言葉がある。「神は御自身の子を罪の肉に似せて遣わされた」。ここでは、まさにキリストが苦しみを受け得ることと御受難とが使徒〔パウロ〕により罪と呼ばれていて、こう続く。「そして、罪のために肉における罪を断罪された」。そして、『ローマの教会への手紙』第6章〔第10節〕では「罪において死ぬということを、ただ1度死なれたのである」と言われた。また、以上のようなことを踏まえてさえ、なお〔奇跡と感じ〕驚くべきは、使徒〔パウロ〕が『ガリラヤの教会への手紙』第3章〔第13章〕でこう言っていることだ。〔キリストは〕「我々のために悪口・呪いとなった」。以上の理由で、〔キリストが〕我々の1重の必然をすなわち罰として受け容れられたのは、我々の2重の必然を、すなわち過ちと罰と滅ぼすためであったと言われるのだ。

しかし、さらに考えねばならないのは、体には2重の欠陥があるということである。そのあるものは、皆に共通のもので、例えば、お腹が空く、のどが渇く、働いた後は疲れる、痛みを覚える、死ぬ、またその類のことだが、あるものは皆に共通しているわけではなく、ある人々に固有のもので、例えば、目が見えない、重い皮膚病である、手足を切断されたなどのことがある。また、以上の欠陥には種差がある。すなわち、我々に共通の欠陥はよそから、すなわち最初の親から受け継いだものである。彼〔最初の親〕は罪のためにそれら〔共通の欠陥〕に陥った。しかし、固有の不足は、個々の人間の特殊な原因によって生じる。

しかし、キリストには、御自身に由来する欠陥の原因が一切ない。また〔御自身の〕靈魂に由来するもの〔欠陥の原因〕も。それ〔御自身の靈魂〕は恵みと知恵に満ちており、神の御言葉と1つ〔だから〕である。また、〔御〕体に由来するものもない。それ〔御体〕は最も善い仕方出来上がり、様々な業への準備が整い、聖霊の全能の力と一致している〔からである〕。そうではなくて御自身の意志によって、我々の救いを取り仕切るために手法として、なんらかの欠陥を〔その身に〕受け取られたのである。したがって、〔キリストがその身に〕受け取らなければならなかったあれら〔欠陥〕は、ある人から別の人へと波及する、すなわち共通のものであって、固有の、個々の人間にそれぞれ固有の原因により生じるものではない。同じく、〔キリストは〕人性を建て直すことをも重視していたので、〔キリストが〕受け取らねばならなかった欠陥は、全自然〔全人類〕のうちに見出された。

また、ここまで述べてきたことから明らかになるのは、ダマスケヌスが言っているように、キリストは我々の取り去るべからざる、すなわち取り去ることのできない欠陥を受け入れたのである。すなわち、知識あるいは恵みの不足〔欠陥〕を受け取ったなら、あるいは重い皮膚病になっ

たり、目が見えなくなったり、または何かその類のことを受け容れたなら、そのようなことはキリストの尊厳を弱めることにつながると思われた。そして、全自然の欠陥からは決して与えられない、〔欠陥を〕取り去る機会だっただろう。

第227章 なぜ、キリストは死のうと思ったか

したがって、ここまで述べてきた^{iv}ことにより、キリストが私たちが不足を受け取ったのは、必然性によってではまったくなく、ある目的、すなわち我々の救いのためにであった。しかし、し得るということとできるということ、あるいはなせるということは、実際にするというを目的としてそれへの秩序をなしている。それゆえ、苦しみ得るということが、償いをし、負い目を果たすためには、実際に苦しむのでなければ十分でない。すなわち、誰かが善いあるいは悪いと言われるのは、そのようなこと〔善いことあるいは悪いこと〕をし得る〔するかもしれない＝可能態〕からではなく、〔善いことあるいは悪いことを実際に〕する〔＝現実態〕からである。賞賛あるいは非難は可能態にではなく、現実態に対してあるべきなのだ。それゆえ、キリストもまた、我らを救うために我らと同じく苦しみ得るだけでなく、我らの罪を償うためにも〔実際に〕苦しもうとされた。

そして、彼は我々のために、我々が最初の親の罪のために苦しむべきことで〔実際に〕苦しまれた。その筆頭が死である。それ以外の人間の苦しみはすべて、これを最終のものとする秩序をなしている。「すなわち罪の罰は死」であるとは、使徒〔パウロ〕が『ローマの信徒への手紙』第6章〔第23節〕で言っているとおりである。それゆえ、キリストもまた、我々の罪のために死を〔その身に〕受けようとしてされた。また我々には相応の罰を、彼〔キリスト〕が過ちなしに受け取られた時、〔キリストは〕我々を死という罰から解放された。誰かが、他の人が彼に代わって罰を引き受けることで、罰の負い目から解放された場合のように。

また〔キリストが〕死のうとされたのは、その死が、我々の償いとなる薬であるだけでなく、また、その死に似ることで我々が肉の生に死ぬべき救いの秘蹟であり、そうすることで我々は霊の生に移される。すなわち、『ペトロの手紙 一』第3章〔第18節〕のあの言葉のように。「キリストは我々の罪のためにただ1度死なれた。正義の人が正義でない人のために。それも我々が神に献げられ、肉に死に、霊に生きるものとせられるために」。

また、死のうとされたのは、我々にとってその死が完全な力の実例だからであった。まず、愛に関して言えば、「友のために靈魂を捨てるようとするほど大きな愛は誰にもない」と、『ヨハネによる福音』第15章〔第13節〕で言われているとおりである。すなわち、友のためにより多く、より重く苦しむことを拒まないなら、それだけ大きく愛していることが示される。そして、人間の悪すべてのうちで死はより重い。それによって人間の生は取り除かれる。それゆえ、人間が友のために自らを死に渡すよりも大きな愛のしるしは決してない。また、勇気に関して言えば、そ

れは敵対されるからといって正義を捨てないということであり、また、死の恐れがあっても、徳を捨てないということは勇気の最も大きい一面であると思われる。それゆえ、使徒〔パウロ〕は『ヘブライ人への手紙』第2章で、キリストの受難について、こう言っている。「死を通して、死を支配していた者を、すなわち悪魔を壊し、死の恐れゆえに、一生奴隷として〔悪魔に〕従属させられていた者たちを解放した」。すなわち、〔キリストは〕真理のために死ぬことを拒まなかった時、死ぬことへの恐れを締め出した。これ〔死ぬことへの恐れ〕こそ、人間たちを罪に最も奴隷として従属させるものだ。また、忍耐に関して言えば、これは、敵対するものの中で悲しみが人間を飲むこむのをそのままにするとということではなく、よりひどく敵対されればされるほど、それだけより強く忍耐の徳を、敵対される中で光り輝かせるということである。それゆえ、もろもろの悪のうち最大のもの、すなわち死の場合、精神をかき乱されることなく受け容れるなら、最も完全な忍耐の見本がある。これがキリストについて預言者〔イザヤ〕が『イザヤ書』第53章で言ったことである。「まるで、毛を刈る者の前の羊のように黙し、口を開かないだろう」。また従順に関して言えば、より困難な状況のうちで従順を貫くほど、その従順はより賞賛されるべきものとなる。そして、すべてのうちで最も困難なものは死である。それゆえ、キリストへの完全な従順を勧めるために、使徒〔パウロ〕は『フィリピの教会への手紙』第2章〔第8節〕でこう言っている。「死に至るまで」御父に「従順を貫く者となられた」。

第228章 十字架の死について

また、同じ理由で、〔キリストがなにゆえ〕十字架の死を望んだかが明らかになる。まず第1に、償いの業という面では適切だからである。すなわち、人間が、そこで罪を犯したものによって罰せられるというのは適切である。すなわち、「罪を犯すのに用いたもので、また拷問される」と、『知恵の書』第11章〔第17節〕で言われているように。そして、人間の最初の罪は、善悪の知識の木の実を、神の掟に背いて食べたことによるので、その代わりにキリストは、自らを木に架けることを許した。詩編作者が、詩編第58篇〔第69篇〕で言っているように、奪わなかったものを償うために。

また、秘蹟という面でも適切である。キリストは彼の死により、我々が肉の生に死んで、我々の霊がより高く上げられたということを示そうと望んだのである。それゆえ、また彼〔キリスト〕は『ヨハネによる福音』第12章〔第32節〕でこう言っている。「私が地から上げられたら、すべてを私自身のところに引くだろう」。

完全なる徳の見本という面でも適切である。すなわち、人間たちは時には、死の苦さに劣らず、罵られる種類〔の死〕であることで死を拒む。それゆえ完全な徳には、徳に含まれる善のために、罵られる死すら受けることを拒まないことがその一面にある。それゆえ、使徒〔パウロ〕は、キリストの完全な従順を勧めるために、「死に至るまで従順にを貫く者となられた」と言った後こ

う加えている。「しかも十字架の死〔に至るまで〕」。これ〔十字架の死〕は、最も見苦しく恥ずべき死と思われていた。『知恵の書』第2章〔第20節〕によれば「最も見苦しく恥ずべき死で、我々は彼を蔑むだろう」。

第229章 キリストの死について

しかし、キリストのうちでは、1つのペルソナのうちに3つの実体がある。すなわち、体と靈魂と御言葉である神が。それらのうちの2つ、すなわち靈魂と体は、1つの本性のうちで1つになっている。キリストの死の際、確かに体と靈魂の合一が分離された。すなわち、言い換えれば、体は真の意味で死ぬものではなかった。というのは体の死とは、それから靈魂が離れることに他ならないが、〔体と靈魂との〕どちらも、ペルソナの合一に関して言えば、神の御言葉からは分離しなかったからである。また、靈魂と体との合一から、人間性が生じる。それゆえ、キリストの体から死によって靈魂が分離した時、人間として死の3日の喪のうちにあったとすることはできない。また、先立つ箇所^vで言われたように、〔キリストが〕人格〔人間のペルソナ〕のうちで神の言葉に合一していたならば、人間キリストについて言われるあらゆることが、子なる神について言うことができるし、相応しいということになる。それゆえ、子なる神のペルソナは死の際もキリストの体に合一し、同じく靈魂にも合一し続けたので、〔靈魂と体の〕それらのどちらについて言われることであれなんでも、神の御子について述語づけられ得た。それゆえ、信経で神の御子について「葬られた」と言われているのは、彼〔神の御子〕と1つである体が墓に横たわったからであり、「黄泉〔地獄〕に下った」と言われているのは、靈魂が下ったからである。

また、考えねばならないのは、男の性はペルソナを表示しているが、〔人性と神性の〕どちらの本性も表示していないのである。それゆえ、我々は三位一体についてこう言う。御子は御父とは異なるが、別のものではない。したがって以上によれば、キリストは死の3日の喪の間、すべてが墓のうちにあり、すべてが地獄にあり、すべてが天にあった。ペルソナのゆえに、すなわち、それ〔ペルソナ〕が墓のうちに横たわる肉と1つであり、地獄を平らげていた靈魂と1つであるがゆえに、〔死の3日の喪の間、キリストは〕神性のうちに天を統べるものとして存立する。しかし、全身が墓にあった、あるいは地獄にあったとは言えない。というのは、人性すべて〔人間としての現実存在すべて〕がというのではなく、一部が墓のうちにあり、一部が地獄にあったからである。

第230章 キリストの死が意志によるものであったこと

したがって、死の本質から言ってキリストの死は我々の死と同じ形をしていた、すなわち靈魂は体から離れていた。しかし、ある点から言えば、キリストの死は我々の死と異なっていた。す

なわち、我々は必然性によって、あるいは自然本性的に、死に従属しているものとして死ぬが、キリストが死んだのは必然ではなく、その権限と本人の意志による。それゆえ、御自身〔キリスト〕が『ヨハネによる福音』第10章でこう言っている。「私は、私の靈魂を捨てる権限も、取り戻す権限も持っている」。

さて、以上のような違いがある理由は、自然のものは我々の意志に従うものではないということである。そして、靈魂の体との結びつきは自然のものであるので、それゆえ、我々の意志にはよらず、靈魂は体と1つであり続けたり、体から離れたりする。すなわち、以上のことはなんらかの作用者の力によって生じるということにならざるを得ない。しかし、キリストのうちに人性のゆえにあるもの、すなわち自然のものはいずれも、全体がその〔キリストの〕意志に従っている。すなわち、全自然がそれに従う神性の力のために。したがって、その〔キリストの〕靈魂をいつまで体と1つにしたままでおこうということはキリストの権限のうちにあったし、また望めばいつでも、〔靈魂は〕それ〔体〕から離れたのだ。そして、以上のような神的な力のしるしを、キリストの十字架の下に居合わせた百人隊長は、彼〔キリスト〕が叫んで息を引き取った時に感じ取った。このことでしっかりと示されたのは、他の人間たちが自然の欠陥のために死んでいたのと違うということである。すなわち、人間たちには叫びと共に霊を送り出すことはできない。死の際には痙攣しながら舌を動かすだけで、それさえ辛うじてできるに過ぎないのだから。それゆえ、キリストが叫びながら息を引き取ったのは、彼〔キリスト〕における神の力を証するものだ。そしてそれゆえに百人隊長はこう言った。「真にこの人は神の御子だった」。

しかしながら、ユダヤ人たちはキリストを殺さなかった、あるいはキリスト御自身が御自分を殺したと言うべきではない。すなわち、誰かを殺すと言われるのは、その死の原因を作る場合であるが、死は死の原因が、生命を保つ自然に勝利するのでなければ起きない。そして、自然が滅ぼす原因に従うか、彼〔キリスト〕が望む限り抵抗するかは、キリストの権限のうちのことであり、それゆえ、キリスト御自身が〔御自分の〕意志で死なれたのだが、それでもやはりユダヤ人たちが彼を殺したのである。

第231章 体に関するキリストの御受難について

そして、キリストは死を〔その身に〕受けようと望まれただけではなく、それ〔死〕以外の、最初の親の罪から子孫へと発していくものを望まれた。すなわち、罪の罰を〔死だけではなく〕すべてそのまま受け取られ、我々が完全に償いを済ませ罪から解放されるために。この〔死以外の苦しみの〕うちあるものは死の前に起き、あるものは死の後に起きる。死の前に起きる体の苦しみとは、自然のものでは、腹が空く、喉が渇く、疲れる、他その類のことであり、暴力によるものでは、傷を負う、鞭で打たれる、その他似たようなことである。それらはすべてキリストが、罪の結果として〔その身に〕受けようと望まれたことである。すなわち、人間が仮に罪を犯さな

かったとしたら、腹が空く、渇く、疲れる、凍えるという苦しみを感じることも、外的なものに暴力で苦しめられるのに耐えることもなかった。

しかし、キリストが以上の苦しみを耐える理由は、他の人間たちが苦しむ場合とは違う。すなわち、他の人間たちの場合、それらの苦しみに抵抗できるものは何もない。キリストの場合、それらの苦しみに抵抗するために、神の創られざる力だけでなく、靈魂の至福までもがある。その力全体が、アウグスティヌスが言うように、その至福が体に、そのやり方であふれ出している。それゆえ、復活の後には、靈魂が神の直視、さらには〔神の〕明白で豊かな享受によって栄光を与えられるだろう、まさにそのことによって、栄光ある靈魂と1つである体が栄光あるものとなり、苦しまない、死なないものとなる。

したがって、キリストの靈魂は、神の完全な直視を、この直視の力の及ぶ限り享受していたので、その帰結として、栄光が靈魂から体にあふれ出すことで、体は苦しまない、死なないものとなったが、栄光が、靈魂から体へあふれ出すことが決して起きなかったので、靈魂が神の直視を享受している時、体も同時に苦しんだということが、法則から外れて起きた。すなわち、既に言った^{vi}とおおり、キリストにとって、人性という面で自然なことは、彼〔キリスト〕の意のままだった。それゆえ、〔キリストは〕上位の部分から下位の部分への自然なあふれ出しを、彼〔キリスト〕の自由で妨げることができた。それぞれの部分に、他の部分に妨害されず、自身に固有のこを受けさせ、あるいはなさせるために。このようなことは他の人間たちのうちではあり得ない。それゆえ、御受難の際、キリストは体の最大の痛みを耐えられた。というのは、体の痛みは決して、理性のより上位の喜びによって和らげられなかったからである。また反対に体の痛みが理性の喜びを邪魔することもないように。

以上のことから、またキリストだけが旅人であり、把握する者である。というのは、神の直視を享受する（これは把握する者に関係している）のは、それでもやはり、体が苦しみに従属し続けるためであり、これが旅人に関係している。そして、旅人に固有のこととは、愛から善なる業を行なうことで、あるいは自分に、あるいは他の人間たちに尽くしているのである。それゆえ、キリストはたとえ把握する者だとしても、やはり、〔キリストが〕作られた、あるいは苦しまれたことによって御自身と我々に尽くされた。確かに御自身に、その宿られた始めから靈魂の栄光は有しておらず、体の栄光を有していた。これ〔体の栄光〕に〔キリストは〕苦しむことで到達した。我々にとってもまた、彼〔キリスト〕の個々の受動とはたらきが救いに役立つものであった。見本としてだけでなく、功德としても。すなわち、愛と恵みのあふれ出しのため、我々にとって恵みが手に入れられるものとなる。頭の豊かさを、手足が受け取るように。

以上のようなのであるなら、彼〔キリスト〕のどのような受難であっても、その最も小さいものまでが、人類を癒すのに十分だった。苦しみがより尊厳ある人格に及べば及ぶほど、大きな不正になると思われる。例えば、君主を打つことは、民衆の中の誰かを打つことよりもそうである〔より大きな不正である〕。したがって、キリストは無限な尊厳を有するので、彼〔キリスト〕のどんな受難であれ無限の評価を有し、だからこそ、無限の罪を捨て去るのに十分なのである。

それでもやはり、〔受難のうちの〕どれによっても人類を贖い尽くしたということにはならない。それは死によっている。先立つ箇所^{vii}で論じた理由で、〔キリストは〕苦しむことを望まれた。すなわち、人類を罪から贖うために。というのは、買うということにはどんな場合でも、一定の価値とそれを買う代価について決める必要があるからである。

第232章 キリストの靈魂が苦しみ得ることについて

しかし、靈魂は体の形相なので、体が苦しめば靈魂もなんらかの形で苦しむということになる。それゆえ、キリストがかの境遇で苦しむ体を持っていたのだから、靈魂も苦しむものであった。しかしながら、靈魂の苦しみには2種類あることを考えねばならない。すなわち、体の側から起きるものが1つあるが、一方もう1つは対象の側から起きるものである。これは、機能のうちある1つのこととして考えることができる。そうであるならばすなわち、靈魂と体は、靈魂の部分と体の部分が対応しているという関係で対応しているということになる。そして、視覚機能は確かに、例えば強過ぎる光で視覚が麻痺するように、対象のせいでも苦しむことがあるが、一方器官の側では、目が傷つけば視力が弱まるようなことが起きる〔体が傷つくことで靈魂の視覚機能が苦しむ〕。

したがって、キリストの御受難について体の側から起きるものとして考えるなら、体が苦しむことで、靈魂も全身全霊で苦しんだのだ。すなわち、靈魂は、その本質上〔靈魂である限り〕体の形相だが、しかし、靈魂の機能はすべて本質に〔靈魂であることに〕由来する。それゆえ、〔結論として〕残るのは、体が苦しめば、なんであれ靈魂の機能はなんらかの形で苦しむということである。しかし、靈魂の苦しみを対象の側から起きるものとして考えるなら、靈魂の機能がすべて苦しむわけではない。苦しみは本来の意味でとるなら害を意味するから、すなわち、〔キリストの靈魂の〕あらゆる機能に対して対象の側から害があり得たわけではない。

すなわち、先立つ箇所^{viii}で既に言ったように、キリストの靈魂は神の完全な直視を享受していた。したがって、キリストの靈魂のうちでより高い理性は、観照し思い巡らすべき永遠のものどもに固く結びついているので、対立するもの、抵抗するものをまったく持たなかった。それ〔対立するもの、抵抗するもの〕があったとしたら、その〔理性の〕うちになんらかの害という苦しみがあつたことになるのだが。しかし、感性的機能は、物的なものをもその対象とし、体の苦しみによってなんらかの害を持ち得る。それゆえ、キリストのうちに感性的な痛みがあつたのは、体が苦しんだからである。そして、体の疲れは、感性によって〔体を〕苦しめるものと感ぜられるように、内的想像力もまたそれ〔体の疲れ〕を〔体にとって〕苦しみとなるものとして捉えているので、体に痛みを感じていない時でさえ、内的な悲しみが起こる。そして、このような悲しみによる苦しみが、キリストの靈魂にあつたと我々は言う。しかし、想像力だけではなく、下位の理性もまた体にとって苦しみとなるものを捉える。そしてそれゆえ、下位の理性、時間的なも

のどもについて思い巡らす役割のそれ〔下位の理性〕による把握によってさえも、悲しみという苦しみはキリストのうちにある。すなわち下位の理性が死と体の疲れを、苦しみとなるものとして、そして自然本性的な欲求に反対するものとして捉えたという限りで。

しかし、愛のゆえになら、それは人間2人を言わば1つにするので、ある人が悲しみにくれるという時、それは想像力によって、あるいは下位の理性によって自分に苦しみとなるものを捉えられたからだけでなく、〔彼が〕愛する他の人々に苦しみとなるものを捉えられたという時にも悲しみにくれるということになる。それゆえに、キリストは、神の愛によって愛した他の人々に過ちの、あるいは罰の危険が迫っているのを知って、悲しみにくれられた。そこでは、御自分のためだけでなく、他の人々のためにも苦痛を感じられたのだ。また、たとえ隣人への愛が、すなわち、隣人が神への愛によって神のために愛されているというその限り〔意味〕での隣人愛がある意味で上位の理性に属しているとしても、それでも、キリストのうちの上位の理性が隣人たちの諸々の不足によって悲しみを有するということはあり得なかった。すなわち、キリストの上位の理性は、神の豊かな直視を享受していたので、神の知恵のうちに保たれている限りで、他の人々の不足に属するものをなんでも認識していた。それ〔神の知恵〕によって正しく秩序付けられたものがあり、またある人は罪を犯すことを許され、ある人は罪のために罰せられる。また、それゆえ、キリストの靈魂も、神を視る至福者も、隣人の不足のゆえに悲しみにくれるということとはあり得ない。

しかし、旅人の場合は事情が異なる。旅人は知恵の根拠を見るということに携わっているわけではない。すなわち、彼らは上位の理性によっても、他の人々の不足について悲しむ。〔旅人たちは〕誰か〔今〕断罪されている人が、それでも救われるべきだということが、神の名誉と信仰を高めることに関わると考えている。そうであるならばしたがって、〔キリストは〕感性、想像力、下位の理性によって苦痛を感じられたまさにそのものどもについて、神の知恵の秩序にそれらに関係付けられたという限りで、上位の理性で喜ばれたのである。そして、何かを他のものに関係付けるのは理性固有の業なので、それゆえ、キリストの理性は死を嫌ったと、〔キリストを〕自然本性の観点で〔現実的存在として〕考えるなら、そう言うのが常である。というのは、すなわち、死は自然本性的には〔現実存在としては〕憎むべきものだからである。しかし、〔キリストを〕理性として考えるなら、〔キリストは〕それ〔死〕を受けることを望まれたのだ。

また、キリストのうちには悲しみがあつたように、悲しみから起きる他の情念、例えば恐れ、怒り、その他そのようなものがあつた。すなわち、ただ今悲しまされたという時、いずれ悪が来ると考えさせられた場合は我々のうちに恐れが生じ、我々が共に悲しんでいるのを誰かが喜んでいる場合は彼に対して我々は怒る。しかし、以上の情念は、我々のうちにあるのとは違う仕方ですキリストのうちにあつた。すなわち、〔以上の情念は〕我々のうちでは、理性の判断の大部分を、時に理性の限度を越えてしまうことで妨げる。キリストのうちでは〔以上の情念は〕決して理性の判断を妨げなかった。また、理性に監査されている限度を超え出ず、下位の欲求が、すなわち情念の基体が、理性が秩序の中でそう動くべきと定めた限りで動かされたに過ぎなかった。し

たがって、キリストの靈魂は下位の部分では何かを嫌いながら、上位の部分では求めていたということが起こり得たし、それでも彼〔キリスト〕のうちに諸欲求の対立、あるいは肉の靈に対する反逆はなかったのである。これ〔肉の靈に対する反逆〕は我々のうちでは、下位の欲求が理性の限度と判断を飛び越えることで、起きる。しかし、キリストのうちでは、理性の判断で〔下位の欲求が〕動いていた。すなわち、〔理性が〕下位の力一つ一つに、固有の運動を許していた分だけ動いており、そうすることでそれ〔固有の運動〕は適切になった。

したがって、ここまで考えられてきたことから、キリストの上位の理性が全体として、その対象との関係で享受し、統治されたということがはっきりする（すなわち、この面〔上位の理性〕では何か、悲しみの原因だったものが彼〔キリスト〕の身に降りかかるということはありません）。しかし、既に言った^{ix}ように、基体という面では全体として苦しめられた。また、かの〔神の直視の〕享受が苦しみを小さくすることもなかったが、苦しみが〔神の直視の〕享受を妨げることもなかった。ある機能から別の機能へのあふれ出しが起きず、あらゆる機能が、先立つ箇所^xで言ったように、自身に固有のはたらきを許されていたからである。

第239章 キリストによって人間のうちに再生された2重の命について

しかし、キリストは彼〔キリスト〕の死によって我々の死を打ち破ったように、彼〔キリスト〕の復活によって我々の命を再生した。そして人間には2重の死と2重の生とがある。死の1つは、靈魂から分離することによる体の死であり、もう1つは神から分離することによる死である。また、キリストの場合、2つ目の死はあり得なかったが、1つ目の死に、すなわち体の死に服することで、我々にあるどちらの死も、すなわち体の死も靈の死も打ち破った。

また同じく、2重の生も対比で理解される。すなわち、その1つは靈魂による体の生で、自然の生と言われる。もう1つは神による生で、正義の生^{xi}あるいは恵みの生と言われる。そして、これ〔神による生〕は信仰による。これ〔信仰〕によって神は我々のうちに住まわれる。『ハバクク書』第2章にあるように。「そして、私の義の人〔正義の人〕は、彼の信仰のうちに生きるだろう」。また以上のことから、復活は2重であることになる。1つは体の復活で、靈魂が再生した体に結びつくことである。もう1つは靈の復活で、再び神に結びつくことである。そして、この2つ目の復活は、キリストの場合あり得ない。というのは、彼〔キリスト〕の靈魂は、罪により神から分離するということが決してないからである。したがって、彼〔キリスト〕の体の復活により、いずれの復活にせよ、すなわち体の復活にせよ、靈の復活にせよ、我々に〔復活の〕原因があることになる。

それでも考えなければならないのは、アウグスティヌスが『ヨハネによる福音』について言っているように、神の御言葉が靈魂を再び目覚めさせたが、肉になった御言葉が体を再び目覚めさせたということである。すなわち、靈魂を生かすということは神にしかできない。それでも、肉

はやはり、彼〔神〕の神性の道具であるが、道具は主要な原因となる力のもとではたらくので、私たちの復活のどちらにせよ、体の復活も、霊の復活も、キリストの体の復活に、それを原因とする関係にある。

すなわち、キリストの肉に起きたことはすべて、統一された神性の力により我々にとって救いとなる。それゆえ、使徒〔パウロ〕はキリストの復活を、我々の霊の復活の原因として示して、『ローマの教会への手紙』第4章〔第25節〕にあるようにこう言っている。「我々の過ちのために渡され、我々を義とするために復活された」と。また、キリストの復活が我々の体の復活の原因であることを、〔パウロは〕『コリントの教会への手紙 一』第15章〔第12章〕にあるように、「もしキリストが復活されたと公に言われるなら、あなたたちのうちの誰かが、死者の復活はないとどうして言うだろう」と〔言っている〕。

また、使徒〔パウロ〕は、キリストが諸々の罪を赦されるということ、至当にも〔キリストの、そして我々の肉における〕死のおかげとしているが、一方我々を義とされるのは、〔キリストの、そして我々の〕復活によるとしている。こうすることで業が、原因と同じ形である、または似ているということが示されるから〔それゆえに、理論的に無理がないことが分かるから〕である。すなわち、罪が赦される時に捨てられるように、キリストは死ぬことで苦しみの生を捨てた。つまり、罪に似たもののある生を。また、義とされる時、新しい生を得るように、キリストは復活することで、新たな栄光を達成した。したがって、キリストの死は我々の罪が赦される原因であり、道具として効果ある原因であり、秘蹟という点で見本となる、かつ功德をもたらす原因である。また、キリストの復活は、我々の復活の、道具として効果ある、秘蹟という点で見本となるが、功德をもたらさない原因であった。というのは、キリストは、報いられる資格を得たがゆえに、もはや旅人ではないからであり、あるいは、復活が明らかとなったのは受難の報いだからである。使徒〔パウロ〕によって『フィリピの教会への手紙』第2章〔第8節以下〕で明らかにされているように。

以上のようなことからしたがって、キリストは「死者のうちから復活する者の長子」と言うことができるのは、時間の順序の上で、すなわち上述²¹のとおり最初に復活した者であるというだけでなく、原因の序列の上で、すなわち彼〔キリスト〕の復活が他の者どもの復活の原因であるということで、また、尊厳の序列の上で、すなわちすべての者よりもより栄光ある者として復活されたがゆえであるということが、確かになる。したがって、キリストの復活についての以上のような信仰を、信仰の信経は保持しており、こう言う。「3日目に死者のうちから復活された」と。

文献表

テキスト

1. S.Thomas Aquinas, *Compendium Theologiae*, in : *Opuscula Theologica*, vol.1, Marietti 1975
2. Thomas von Aquin, *Compendium Theologiae, Grundriss der Glaubenslehre*, uebersetzt von Hans Louis Faeh, Heidelberg 1963

-
- i 本書（『神学綱要』以下同じ）第200章
 - ii 本書第213章
 - iii 本書第193章
 - iv 本書第226章
 - v 本書第203, 211章
 - vi 本書第230章
 - vii 本書第227, 228章
 - viii 本書第216, 231章
 - ix 本書本章
 - x 本書第231章
 - xi トマスの正義概念のうちでも、比喻による正義か。
 - xii 本書第236章